

青森のハンセン病療養所・松丘保養園

生活の断片熟視して

青森市の国立ハンセン病療養所 陶芸が並ぶ。

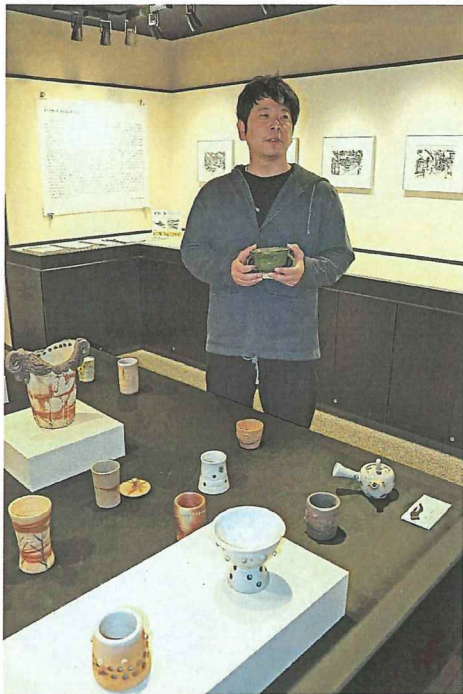
「松丘保養園」の暮らしなどを伝える企画展「ダイアログ 松丘保養園と出会う」が、弘前市の弘前大資料館で開かれている。入所者など4人の作品が展示され、社会と園との関わり方を問いかけている。

かつて入所した成瀬豊さん(1922〜2013年)のデッサンと、今も在所する伯龍さん(80)の

陶芸が並ぶ。

成瀬さんの作品は多くが点字用紙に描かれている。ホチキスでとじた穴があり、使い古しのノートを再利用したことを思わせる。特効薬がなかった時代の後遺症の深刻さ、十分な画材を手に入れられなかった生活に連想が発展する。

伯龍さんは普段使いの食器などを出品。松丘で生まれた陶器は、手に感覚障害のある入所者がやけ



伯龍さんの陶器を手に企画展の意図を説明する白石さん

弘前大で企画展 入所者など4人出品

どをしないよう、使いやすさに工夫が施されている。

別の部屋には写真家の木村直さんと、環境デザイナーの広瀬俊介さんの作品がある。2018年から松丘に通う木村さんの作品は「この松林は誰のためにあるのだろうか」と題するシリーズで、敷地の周囲に残る松林や土塁の意味を問う。広瀬さんは園の周辺を環境調査した際のフィールドノートを出展し、地域社会と保養園の関係性に意識を向けさせる。

弘前大人文社会科学部地域未来創生センターの主催で、白石壮一郎准教授(文化人類学)らが企画した。作品解説の掲示を最小限にしたことについて白石さんは「字を読んで満足してほしくない。松丘の生活の具体的な断片である作品を熟視し、何かを学び取ってほしい」と語り、松丘への訪問者が増えることを望む。

企画展は29日まで。入場無料。日曜祝日は休館。公開講座が15日午後4時から弘前大総合教育棟201講義室であり、白石さん、伯龍さん、田中さんらが登壇する。

※この記事は河北新報社提供です。この画像は、当該ページに限って河北新報の記事利用を許諾したものです。転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。

[問い合わせ先] 弘前大学資料館 jm3432@hirosaki-u.ac.jp